

育む資質・能力を教員の議論から設定。 取組の全体像を見える化し、PDCAを回す

高崎北高校 (群馬・県立)

高崎北高校は3年前より、教育活動全体を根本から見直し、新しい学校づくりに取り組んできました。
その核にあるのは、生徒に身に付けて欲しい資質・能力です。
どのように推進し、そのなかで生徒はどう成長してきたかをレポートします。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 総合的な探究の時間 🔍 人間関係づくり 🔍 探究型インターンシップ 🔍 探究プログラム
🔍 オンライン・インタビュー 🔍 カリキュラム・マネジメント 🔍 外部連携

資質・能力を核とする グランドデザインを作成

群馬県立高崎北高校は、生徒の多くが大学進学を希望する進学型単位制高校だ。大学受験に向けた3年間のロードマップを作成し、生徒の進路実現を第一に取り組んできた。そんな同校に2018年、「社会に出て生きていくために必要な力を高校時代にしっかり育みたい」という思いをもつ丸橋 覚校長が着任。校訓に掲げられた「未来を拓く」人の育成にもつながる、学習指導要領が示す資質・能力の3つの柱を重視する学校づくりに全校体制で取り組んできた。

その核にあるのは「高北生に身に付けて欲しい資質・能力」だ。全教員で行うカリキュラム・マネジメント研修において、同校生徒にはどんな課題があるか、何を身に付けて欲しいかについての議論から抽出したキーワードが基になっている。20年度に設定されたのは、「主体性」「コミュニケーション能力」「探究心」「チャレンジ精神」、そして「基礎的な知識・技能」だ。なかでも教員からの指摘が目立つのは主体性に関する課題感だという。

「本校の生徒は真面目で、決められた枠組みの中で自ら行動できる。自主性もありません。それをもう一段上げて、自ら何をすべきかを考えて行動するような主体性を身に付けてほしい、という意見が多く聞かれます」（木村一実教頭）

資質・能力が設定できると、その育成に必要な取組について各教科・分掌から

意見を吸い上げ、グランドデザインとして一つの図に整理(図1)。各教室に掲示するなど、教員と生徒で共有している。

「テーマパークのマップのように教育活動全体を俯瞰することで、先生方が自身の立ち位置や何をすべきか見えやすくなるのではないかと。また、授業改善やICT化などの新しい事が、ばらばらではなく、一つの方向性をもって理解でき、取り組みやすくなるのではないかと考えています」（丸橋校長）

グランドデザインは一度作ったら終わりではない。7月に1回目のカリキュラム・マネジメント研修を実施。その年度に設定した資質・能力の育成のために授業や特別活動ごとにどのような取組を行い、それで生徒はどう変化しているかについてグループ協議を行う。10月に行う2回目の研修では、次年度に設定する資質・能力について意見を交わす。そうした議論を基に、年度末までにグランドデザインを改定する。これを毎年繰り返していく方針だ。



今年度も10月のカリキュラム・マネジメント研修で、全教員が4人グループに分かれて「身に付けて欲しい資質・能力」をテーマに意見を交わした。



School Data

1978年設立／単位制普通科
 生徒数720人(男子365人・女子355人)
 進路状況(2020年3月卒業生)
 大学191人・短大18人・専門学校16人・
 就職1人・その他17名
 群馬県高崎市井出町1080
 TEL 027-373-1611

Outline

校訓「未来を拓く」の下、教育目標に「(1) 豊かな人間性を養い、高い知性・たくましい意欲・主体的な行動力を身につけ、自主自立の精神で未来を切り拓いてゆこう」「(2) 夢と感動のある体験を通し、輝く個性を磨き、21世紀を自立して生きてゆく人間となろう」を掲げる進学型単位制高校。同校独自の取組の名称には、シンボルツリー「あらがぎ」(いちい)の名が用いられている。



NPO法人DNA
 代表理事
 沼田翔二朗さん



あらがぎ探究推進部
 小坂橋玲子先生



あらがぎ探究推進部
 岡本隆司先生



あらがぎ探究推進部長
 志村克樹先生

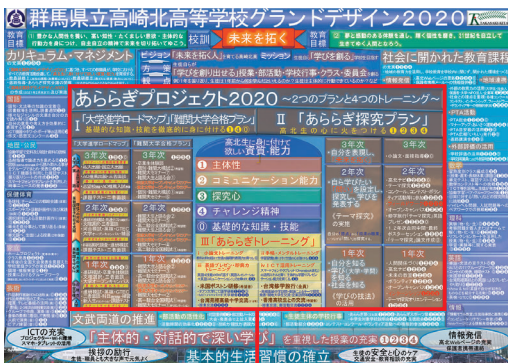


教頭
 木村一実先生



校長
 丸橋 覚先生

図1 高崎北高校グランドデザイン2020

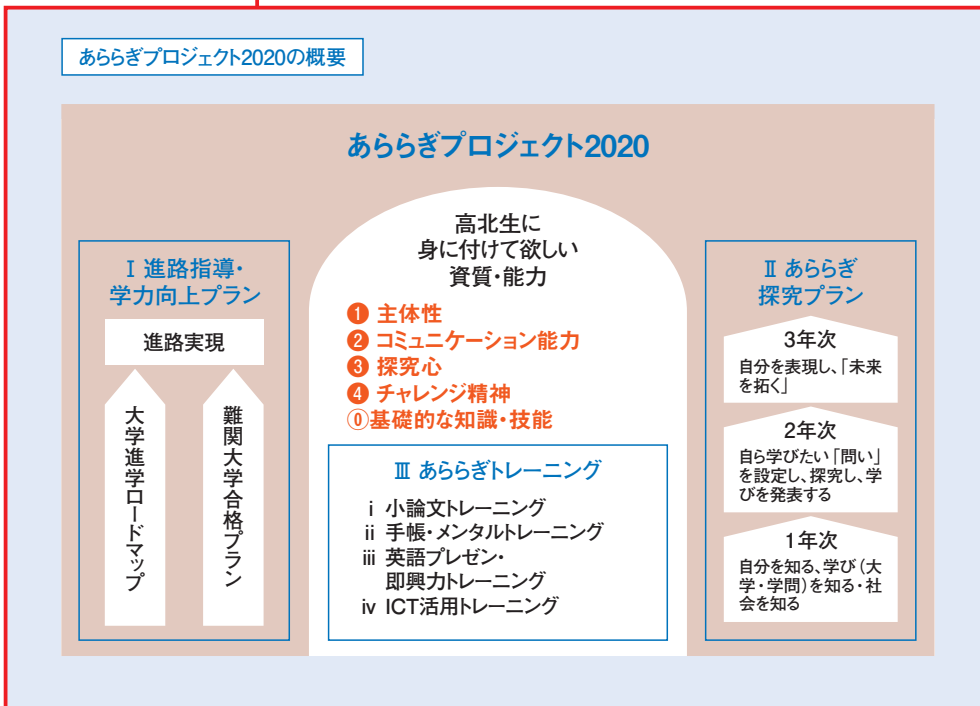


「文字を並べただけで終わっては意味がありません。毎年先生方の意見を注ぎ込み、PDCAを回して動かしていくことが重要だと思います」(丸橋校長)

調べ学習から、人との関わりで深める探究へ

今年度のグランドデザインの特徴は、これまで拡充を図ってきた特徴的な取組を「あらがぎプロジェクト2020」として再整理している点だ。生活習慣やICT活用などに関する4つのトレーニング(あらがぎトレーニング)を土台として、進路指導(大学進学ロードマップ・難関大学合格プラン)と探究(あらがぎ探究プラン)の両輪を連携させながら回していくイメージを見える化し、一層の強化を図っていく。

このうち特に力を入れてきたのが、「高北生の心に火をつける」ことを掲げて総



「あらがぎプロジェクト2020」の図は、「高北生に身に付けて欲しい資質・能力」に向かって開かれた凱旋門のイメージで作ったという。グランドデザインでは左右に、教科ごとに、どんな学習を通じて何の力の育成につながるかが「資質・能力」の番号に紐づけて列挙されている。
 ※概要版は学校の資料を基に編集部で作成

合的な探究の時間で展開する「あらがぎ探究プラン」だ。以前から個人テーマに取り組むプログラムを展開していたが、書籍やインターネットでの調査が中心だった。「単なる調べ学習で終わらない、もっと自分を高めていく取組を目指したい」。志村克樹先生が率いるあらがぎ探究推進

部が中心となり、改善を図ってきた。最大のポイントは、学校外を含む幅広い人との関わり強化だ。その強力な推進のため、キャリア学習プログラムの企画・開発・運営などを行うNPO法人DNAと業務委託契約を締結。プログラム設計やワークシート作成、授業運営などを

高北ナビ



少人数グループで、1年生が2年生から学校生活やテーマ探究について教えてもらう。1年生はこれからの学びがイメージでき、縦の人間関係もできる。

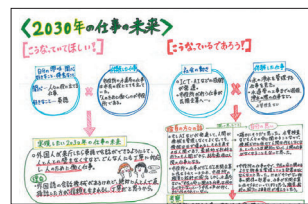
探究型インターンシップ



市役所でインターンシップに取り組む生徒たち。ほかにも地域のさまざまな企業や医療機関などで数人ずつ分かれて実施。



インターンシップ後に開催するポスターセッションには、1年生のほか、2年生、受け入れ事業所関係者、保護者も参加する。



高崎市役所水道局でインターンシップを行った生徒がまとめたポスターの一部。

では、現在のあらが探究プランは具体的にどのように実施されているか、3年間の流れを追ってみよう。

1年次初期は、自己開示が必要となる探究の実践に向けた、土台づくりという位置づけだ。クラスを安心して学び合える場とするための自己紹介グループワー

未来の仕事のあり方を考える
進学校のインターンシップを導入

協働で行ってきた。DNA代表理事の沼田翔二郎さんは、あらが探究推進部の会議にも参加し、生徒の相談に乗ったり助言したりしている。

「明確なブランドデザインがあるため、先生方と議論しても、どのような人を育てるために探究に取り組むのかという視点がぶれにくい。外部のコーディネーターとして非常にやりやすいと感じています」(沼田さん)

その上で夏休み(今年度は11月)に「探究型インターンシップ」を行う。これは19年度に始めた取組で、職場での体験を通じて社会の実態を理解し、「2030年の社会をつくる仕事の未来」をイメージすることで、進路選択の視野を広げることがねらいだ。昨年度は80件以上の企業や団体の協力により実施した。事前学習を経て、各自が興味ある分野や将来の目標と関連する事業所を選定し、直接受け入れを依頼。3日間のインターンシップでは、経営者や社員にインタビューも行う。実施後は、体験による自分の変化や、仕事の未来に対する考察などを一人ひとりがまとめ、ポスターセッションを開催。その内容を全

員分収録し、「仕事図鑑」として製本する。「実は当初、この活動がどれだけ役立つのだろうかという不安もありました。しかし実際やってみたら、ポスターセッションでは多くの生徒が目を見て堂々と発表する。その姿を見て、いかに生徒たちが刺激を受けたかが伝わり、やって良かったと思えました」(志村先生)

生徒の原点から出発する探究。指導や批評はせず伴走する。

1年次後半からは、本格的にテーマ探究に取り組んでいく。生徒は小さいころから興味をもっていた事や大切にしていた事など自分の「原点」に目を向け、「A」と人間はどのように付き合っていくべきか」「児童虐待とこれからの福祉」「野菜を食べて世界を救おう!」といった個人テーマを設定。生徒は自ら企画してアンケート調査や実験を行ったり、関連する大学や企業・団体、個人などを探してフィールドワークに取り組んだりしながら、テーマを深めていく。今年度はコロナ対策のため、フィールドワークをオンラインでのインタビューに切り替えて実施した。

「積極的に外に出て活動する生徒が増えてきました。先輩の探究を共有しているの、それを参考に、年々自由度が上がっているように感じます」(志村先生)

教室では生徒同士でテーマを共有し、頻繁にディスカッションやグループワークを行う。また、テーマ決定やフィールドワーク実施の節目では、1年生を交えてクラス横断のポスターセッションを実施。2年

次秋の台湾修学旅行では、現地の高校生に向けて各自の探究内容を英語で発表する。こうして多様な人々に採られながら、探究を深めていく。

そのなかで教員は、自身の知識や価値観に基づく「指導」ではなく、「伴走」を心掛けていくという。生徒の設定したテーマに対して「批評」はしない。

「ある生徒が『犬と話せるか』というテーマを設定したとき、私にはこれで探究ができるのかわかりませんでした。しかし生徒は、科学的に研究している人を探し出し、生体検査に基づく医学的アプローチや動物が人に与える心理的影響など、自分の目標である看護の分野に関連させながら探究を深めています。教員の感覚で良し悪しを決めてしまうと、生徒が自ら教員を越えていく可能性をつぶしかねない。それより一緒に面白がるのが教員の役割ではないか、と考えるようになりました」(岡本隆司先生)

3年次では、こうして探究で取り組んできたことを小論文や大学進学志望理由書として表現できるようにし、進路への接続を図る。

探究や授業、その他の活動が連動し生徒の学びに向かう姿勢が変化

探究以外の面でも、設定した資質・能力を意識して日々改善を重ねてきた同校。生徒からは、「将来の目標が見えてきた」「自分で考えて行動するようになった」「挑戦する楽しさを知った」「本気でやりたいと思えば協力してくれる人がいるこ

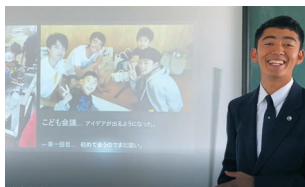
テーマ探究



1年次では「いかに自分の探究が魅力的か」を各自が作成したスライドを使ってグループで発表し合うなど、プレゼンする方法や傾聴の大切さを学ぶ。



図書館や視聴覚室などに分かれ、スマートフォンを使って探究テーマに関連する専門家や企業にオンラインインタビューを実施。



自然を守りたいというある生徒は「100人キャンプ」を企画。子育て支援活動を行うNPOに協力を仰ぎ、参加する子どもたちの意見を取り入れながら開催した。

「実践してみたいことがあればやれる雰囲気があります。生徒に『失敗しながら成長しよう』とよく言いますが、我々も同じ。積極的に挑戦していきたいと思いま

とがわかった」「テーマ探究で学んだ思考方法を、授業や部活動でも実践するようになった」など、さまざまな気づきや成長を実感する声が上がります。

教員も、同校の教育活動の総合的な成果として、「授業や探究で自信をもって発表する姿が見られるようになった」「自分の意見を積極的に言える生徒が増えている」「やらされ感ではなく、自分の目標のために学習しようという生徒が増え、安心して宿題を出すことをやめられた」といった手応えを感じている。こうした生徒の成長について、志村先生は「殻を破る」というイメージで捉えているという。「人は大人になるにつれて『自分はここまで』という殻を作っていくものですが、高校生はそれを破って進む段階。私たち教員は、『こうしなさい』『あれはダメ』と殻を固める関わり方をしないよう注意するとともに、教員だけでなく友達や地域

の大人など多様な人が殻を叩く機会を充実させてきました。今、それが生徒に響きつつある。それぞれが殻を破るきっかけを掴み、大きく飛び立ってほしいですね」

学校が進化するプロセスにおいて、大きな推進力となるのが管理職のリーダーシップだ。丸橋校長は、学校改革のリーダー育成のための外部研修に参加して自らのやり方を見つめ直すなど、試行錯誤しながら取り組んできたという。

「私から新たな提案を行うときは『5W1H』を意識し、特に『なぜ』これが必要なかの丁寧な説明を心掛けてきました。また、先生方から自由闊達な意見が出るよう、一対一の対話を大切にしています。木村教頭が分掌間、教員間をつなぐコミュニケーションに力を発揮してくれていることも、物事をスムーズに進めるうえで大きいと思います」(丸橋校長)

そのなかで、教員の前向きな取り組みが促進されているようだ。

「研修で共有されたほかの先生の話をもとに、主体性やコミュニケーション能力を意識して、自分の音楽の授業に生徒の発想や企画を活かした活動を取り入れるようになりました」(小坂橋玲子先生)

「実践してみたいことがあればやれる雰囲気があります。生徒に『失敗しながら成長しよう』とよく言いますが、我々も同じ。積極的に挑戦していきたいと思いま

教員一人ひとりの主体性で進化する学校に向けて

Interview

やりたいことの芯が明確に

自分はスポーツが好きで、小学生の頃からバスケットボールや陸上競技をがんばってきました。その経験を基に、探究では「スポーツを楽しむ・がんばるための靴選び」をテーマにしました。友人にアンケートを取ってみて、自分の足の形や靴選びに対する意識はあまり高くないことがわかったので、部活をがんばっているみんなの靴選びに自分の探究内容が役立つのではないかと、という思いで取り組んでいます。そのなかで、自分のやりたいことの芯がはっきりしてきました。将来は、プロスポーツ選手を支える仕事がしたいと思っています。(2年 小坂橋奏太さん/写真左)



目標に向かって自ら計画を立て実行

市民に愛され住みやすいと思われる地域のあり方をテーマに、探究に取り組んでいます。リサーチやインタビューをしてみて、人によって望む地域活性化の方向は違い、いろんな人の立場に立って考える必要があると気づきました。将来、地域の活性化に携わりたくて、大学に進学し、幅広い分野に興味をもって学んでいきたいと思っています。それには高校の勉強も大事。毎日、学校で配られた手帳を活用して勉強や部活のトレーニングの計画を自分で立て、信号待ちの隙間時間も使って実行しています。高校生になって「成長した」とはまだ言えませんが、「成長するぞ!」という気持ちで毎日過ごしています。(2年 小川陽和さん/写真中央)

何事でも「ハテナ」を追究する力を大切に

小さいころから自然の中で遊ぶことが好きでした。川で見つけたカジカという魚が準絶滅危惧種であることを知り、「この魚を守りたい」と思ったことが僕の探究の原点です。自然の良さを知ること自然を大切にすることが育まれるのではないかと考え、子育て支援活動を行うNPOに協力を依頼して、昨年の夏、主に小学生を対象とした「100人キャンプ」を企画、実施しました。参加した子どもたちからは、自然の中で遊ぶ楽しさや魚の命の大切さなどの感想が聞かれ、手応えを感じています。自分の「ハテナ」を、いろんな人に協力してもらいながら、自分の力で少しずつ前に進めていく大切さを学び、教科学習や部活動でも自分の「ハテナ」を大事にして取り組むようになりました。大学では森林科学について学び、将来は自然を好きな人を増やす活動をしていきたいと考えています。(3年 花井波実さん/写真右)

す(岡本先生)

来年度について、木村教頭は「校長のリーダーシップから先生一人ひとりの主体性に軸を移す年にしたい」と展望を語る。丸橋校長は、これまで自ら担ってきたカリキュラム・マネジメント研修の企画・運営やグランドデザインの作成を、分掌業務に移行させていく考えだ。

「最近では会議でも先生方からどん

意見が出てくるようになりました。任せれば私が想像する以上の活躍をしてくれる先生方だと思います。最初の仕組みづくりはスピード重視で私が主導しましたが、これからはミドルリーダーを中心に先入観なく取り組んでほしい。そのなかで、生徒に身に付けてほしい資質・能力を核とした教育活動を、さらに進化させていきたいと考えています」(丸橋校長)